

授業科目等の概要

(医療専門課程 理学療法学科夜間部)																
	分類			授業科目名	授業科目概要	配当年次・学期	授業時数	単位数	授業方法			場所		教員		企業等との連携
	必修	選択必修	自由選択						講義	演習	実験・実習・実技	校内	校外	専任	兼任	
1	○			基礎理化学	力学について物理学的な基礎知識から学ぶ。また人体の基本的な運動生理学を理解し筋収縮、代謝様式を理解する。	1前	30	2	○			○		○		
2	○			コミュニケーション論	コミュニケーションの基本を理解し、医療人として必要な基本的態度を学び、コミュニケーション能力を身につける。	##	15	1	○			○		○		
3	○			情報統計論	レントゲン、CT、MRIなどより得られた画像から必要な情報を抽出し、また文献検索の方法などを学習する。	1前	30	2	○			○		○		
4	○			心理学	クライアントの状態は、「total person」の観点から理解する。さまざまな心理アセスメント方法を学ぶ。	1後	30	2	○			○			○	
5	○			人間発達学	胎児期から老年期に至る人間の発達を通し、各発達段階における心身の成長および運動獲得について学ぶ。	1後	45	3	○			○		○		
6	○			基礎運動学	人の基本的動作の構成、歩行、運動を継続する仕組みについて知識を統合して学習を進めていく。	1前	30	1		○		○		○		
7	○			生活環境論	障害の有無に関わらず人が生きていく上で最も身近で、基本的に存在する生活環境を学ぶ。	1後	60	4	○			○		○		
8	○			人体構造機能学Ⅰ	人体の構造と仕組み・機能について理解することを目的とする。	1前	30	2	○			○		○		
9	○			人体構造機能学Ⅱ	運動器（骨・関節・靱帯・骨格筋）それぞれの解剖学的特徴から、それらの機能を理解する。	1前	30	2	○			○		○		
10	○			人体構造機能学Ⅲ	中枢神経系と末梢神経系の基本構成について学習し、これらの疾患に応用する基本的知識を習得する。	1前	30	2	○			○		○		
11	○			人体構造機能学Ⅳ	循環器、呼吸器、消化器、泌尿生殖器、内分泌、ホルモンの基本構造を学び、それぞれの器官に関連する疾患に応用するための基本的知識を習得する。	1前	30	2	○			○		○		
12	○			人体構造機能学Ⅴ	人体構造機能学で学んだ骨・筋について、模型のデッサンや触診技術を通じて、周囲の組織との位置関係をより深く学んでいく。	1前	90	6	○			○		○		
13	○			精神疾患論	精神障害をもたらす精神疾患の病状・成因や診断・治療について理解し、それらを基に理学療法士としての精神障害者への社会生活面での援助のあり方を習得する。	1後	30	1		○		○			○	

14	○		基礎病態論	神経・運動器疾患やその他の疾患の成因や病態を理解しておくことは、理学療法を学ぶ上で重要であり、理解する必要がある。	1通	30	2	○			○			○	
15	○		内部障害論	吸引やAEDの使用方法について学ぶ。また、薬物の作用機序や副作用などについても学習する。	2前	30	2	○			○				○
16	○		機能障害論	疼痛のメカニズム、肺・心臓器官における機能とその障害について生理学の復習を兼ねて理解する。	1後	30	2	○			○		○		
17	○		整形障害論	リハビリテーションで、対象となる主に骨関節障害の病態を画像とともに理解し、一般的に行われている整形外科的治療を理解する。	2前	30	2	○			○		○		
18	○		臨床病態論	病理学の基礎、様々な症候に対して行われる画像検査、生化学検査、生理検査などの諸検査の所見を学ぶ。	1後	60	4	○			○				○
19	○		神経障害論	神経筋疾患を中心にその病因・病態・治療・予後について学習する。	2前	30	2	○			○		○		
20	○		リハビリテーション概論Ⅰ	理学療法士の立場から保健・医療・福祉に関わる業務を実施する上で必要となる諸制度について理解する。	1前	30	2	○			○		○		
21	○		多職種連携論	健康・医療・福祉の専門職を目指す者として、対象者を中心としたチーム医療の意義、他職種連携を通じた調整や教育的役割を担う能力を学ぶ。	1前	30	2	○			○		○		
22	○		理学療法総論	理学療法士の適正と資質や評価、治療の流れ、基礎となる解剖学の知識を学ぶ。	1前	60	2		○		○		○		
23	○		臨床運動学	基本動作を可能にするメカニズムを理解し、臨床現場で高頻度に見られる逸脱・代償動作観察を行い、原因を推論する思考を身につける。	2前	30	1		○		○		○		
24	○		日常生活活動学	リハビリテーションにおける重要な概念を学ぶ。それを理解し、各疾患毎のADL指導の実際について理解を深める。	2通	90	3		○		○		##		○
25	○		理学療法管理学	グループワーク中心に組織の能力を最大限に発揮する具体的な管理・教育について学び、理解を深める。	3前	30	2	○			○		○		
26	○		理学療法評価法Ⅰ	実技を通してバイタル測定、形態測定、関節可動域測定法、徒手筋力検査法を学ぶ。	1通	120	4		○		○		○		
27	○		理学療法評価法Ⅱ	理学療法で実施する各評価の意義と目的、方法と結果の記録について説明する。	2前	120	4		○		○		○		
28	○		理学療法評価法Ⅲ	障害像から評価項目の立案、評価方法の検討、さらに正確性・再現性・妥当性のある理学療法評価の実施、評価結果の解釈について展開していく。	3前	90	3		○		○		○		
29	○		理学療法評価演習	模擬患者に対し各領域の理学療法評価の立案、正確性・再現性・妥当性のある評価の実施と記録、結果の解釈を行う。	3通	90	3		○		○		○		
30	○		基礎運動療法学	理学療法を行う上での可動域、筋力、平衡機能などの基礎知識について学習する。基本的な介入手段・各障害に対しての運動療法を学ぶ。	2前	45	3	○			○		○		

31	○		整形障害理学療法	整形障害領域の障害の特徴を理解し、理学療法プログラムの選択について、機能形態学・運動機能学の観点から説明ができるようになることを目的とする。	2後	60	2		○		○		○						
32	○		神経障害理学療法	解剖学・神経内科学で学んだ中枢神経疾患に関する知識を整理・再確認をし、さらに理学療法との関係や意義を理解する。	2後	60	2		○		○		○						
33	○		内部障害理学療法	循環器、呼吸器、代謝系疾患による機能障害に対する理学療法を学ぶ。	2後	60	2		○		○		○						
34	○		物理療法学	基本的物理刺激が物理療法として人体にどのように働くのか理解し、各治療法の適応・禁忌・注意点を理解する。	2前	60	2		○		○		○						
35	○		義肢・装具学	装具療法の意義・目的等を理解し、上肢、下肢、体幹装具の種類について適合判定・適応について学習する。	2前	60	2		○		○		○						
36	○		小児理学療法	頻度の高い小児疾患の病態と疾患の特徴を理解し、それらに対する対応を系統的かつ全人的に学ぶ。	2前	60	2		○		○							○	
37	○		理学療法各論	運動療法を施行するうえで必要な知識について学習する。また運動に伴う身体の変化・反応について理解し、運動療法への理解を深める。	2前	30	1		○		○		○						
38	○		理学療法技術論	理学療法士として必要とされる知識を総合的に学習し、これまで学習した知識の整理、応用について学習する。	3通	270	9		○		○		○						
39	○		地域理学療法学	グループワークを通して、模擬症例に対する介護保険サービスで利用、理学療法士の役割などを考え、知識を整理する。	2通	90	3		○		○		○						
40	○		臨床実習Ⅰ	関連施設の臨床現場を見学し、医療人・社会人としての意識を高める。また、患者や職員と関わることで、コミュニケーション能力を高める。	1後	45	1			○		○		○		○		○	
41	○		臨床実習Ⅱ	保健医療福祉における実施機関・施設（訪問リハビリテーション、通所リハビリテーション等）での見学実習を通して学ぶ。	2後	45	1			○		○		○		○		○	
42	○		臨床実習Ⅲ	様々な対象となる方を通じて基本的な検査項目を臨床実習指導者のもと見学・模倣することで知識や技術の研鑽を行うことを目的とする。	3前	270	6			○		○		○		○		○	
43	○		臨床実習Ⅳ	臨床実習指導者のもと対象となる方への基本的な検査項目の実施及び治療を見学し、医療専門職としての責任ある態度や行動を学ぶ。	3前	270	6			○		○		○		○		○	
44	○		臨床実習Ⅴ	対象となる方に応じた基本的な理学療法手段を模倣することでさらに自己研鑽することを目的とする。	3後	315	7			○		○		○		○		○	
合計				44 科目	119 単位（単位時間）														

卒業要件及び履修方法		授業期間等	
卒業要件：所定の期間在籍し、全科目を履修し認定を受けること		1学年の学期区分	2期
履修方法：履修単位制。授業科目を履修して試験に合格すれば科目認定を与えられ		1学期の授業期間	15週

（留意事項）

- 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、主たる方法について○を付し、その他の方法について△を付すこと。
- 企業等との連携については、実施要項の3（3）の要件に該当する授業科目について○を付すこと。